

事業実施報告書

団体名:新座自然宿

事業名:ピアジョブコーチによるひきこもりの方のための就労支援

1 事業の目的

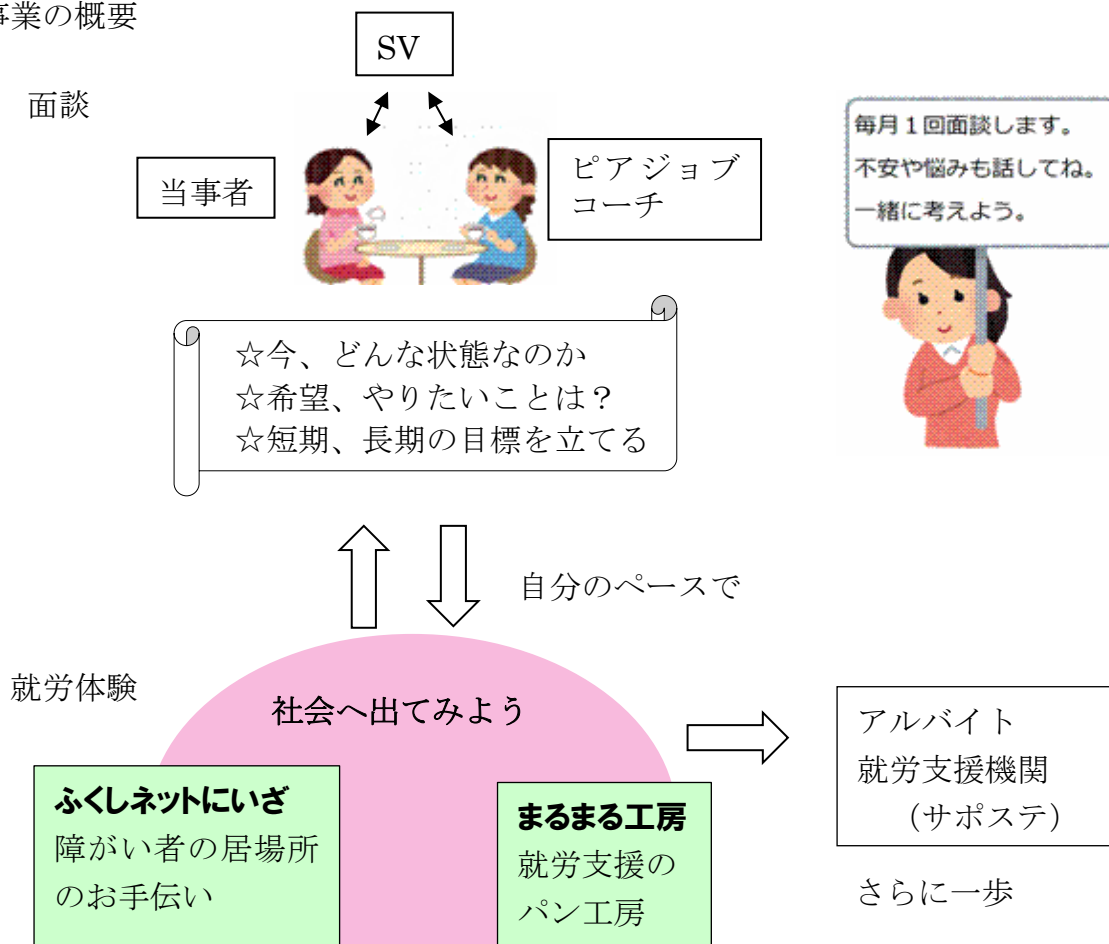
ひきこもり対策は各自治体でも関心を集める社会問題の一つです。対策の入口の相談事業はひきこもり相談サポートセンターが立ち上がるなど、徐々に充実してきていますが、出口の就労支援は十分とは言えません。特にひきこもりの方の就労支援は若者の就労支援の中でも難しいとされています。

ひきこもりの居場所事業の実績のある新座自然宿では、複数の働く場との連携を深めてきました。その連携を活用して新しいスタイルの就労支援の提案と実践に取り組みました。

自己肯定感の少ないひきこもりの方は過度のストレスが苦手です。自分自身ひきこもり経験のある先輩ならば、それが理解できるのでピアジョブコーチになってもらいます。ピアジョブコーチは当事者の苦しさを理解し、丁寧に接し、時には友達として励まします。それにより、何度も現れる障壁を乗り越えることができ、就労が定着しやすくなります。その結果、就労により自己肯定感がさらに高まります。また、ピアジョブコーチにとっては、ひきこもりの経験が活かして、やりがいのある仕事になります。

2 事業内容

(1) 事業の概要



- ①月に1回 30 分程度の面談。
- ②ピアジョブノートを利用する。
- ③会話(コミュニケーション)を重視。
- ④SV(スーパーバイザー)の利用
SV の役割 スムーズな話し合いが成立するようにアドバイスする。
話し合いの内容には介入しない。
- ⑤当事者とピアジョブコーチが 就労、ボランティア等の計画を進める。

ピアジョブコーチの意義

支援を受ける人にとって

話しやすい。目線が同じ。心の傷を理解してくれる。
支え合う関係の仲間ができる。
自己肯定感が育つ。

→仕事のストレスに耐えられる。

支援する人にとって

自分の体験を再認識できる。自分の経験が生かせる。
自立に向けた長期的な展望が持てる。
人を支える立場を経験して高い意識が育つ

→人生脚本を書き換えて自己実現を目指すきっかけになる。

(2) 事業の流れ

- ①面接 新座自然宿会議室 または、新座ふれあいの家ロビー

S さん	6/14、7/15、9/2、10/18、12/2、1/6、2/28	(コーチ F さん)	7 回
F さん	6/13、7/19、9/13、10/11、12/2、1/24、2/21	(コーチ T さん)	7 回
M さん	6/23、7/14、9/1、10/4、11/10、12/5、1/19、2/13	(コーチ T さん)	8 回
I さん	9/20	(コーチ F さん)	1 回

- ②ボランティア ふくしネットにいざ

S さん 6/28、7/26、9/27、10/25、11/29
M さん 6/8、6/23、7/28、9/29、10/27、11/24
畑作業手伝い、書類の廃棄作業手伝い

- ③就労

- まるまる工房

S さん 6 月 8 回 10.5 時間、7 月 9 回 16 時間、8 月 15 回 34 時間、
9 月 10 回 18 時間、10 月 15 回 34.5 時間、11 月 15 回 33.5 時間、
12 月 9 回 24.5 時間、1 月 9 回 28.5 時間、2 月 9 回 25.5 時間

- ふくしネットにいざ

F さん 6 月 3 回 18 時間、7 月 3 回 18 時間、9 月 1 回 6 時間、
10 月 2 回 16 時間、11 月 2 回 6 時間、12 月 3 回 18 時間、
1 月 1 回 6 時間

④広報 パンフレット作成と配布

6月中旬 パンフレット作成

7/12 39部郵送

8/24 10部郵送

郵便配布の内訳 保健所 13 県施設 6 民間施設 16 個人 14

8/13 朝霞保健所主催の講演会 産業文化センター 参加者 50人 70部

11/18 東松山保健所主催家族教室 東松山保健所 参加者 30人 15部

12/15 朝霞保健所主催家族教室 朝霞保健所 参加者 20人 20部

2/7 県疾病対策課ひきこもり支援連絡会議 第三庁舎 参加者 30人 50部

2/25 新座市地域デビューセミナー ふるさと新座館 参加者 50人 50部

計 270部

⑤事業の様子 別紙1参照

(3) 連携・協力機関

就労機関 NPO 法人ふくしネットにいざ、まるまる工房

紹介機関 県立精神保健センター、朝霞保健所、東松山保健所
県庁保健医療部疾病対策課

3 成果及び今後の展開

改めて、ひきこもりの就労支援の難しさがわかった。自己肯定感が少ないので、就労と関係ない出来事で気持ちが落ちてしまい、計画通りには進まない。しかし、ピアジョブコーチの成果として、2人の就労は継続できた。Sさんは、順調な就労体験からまるまる工房の新しい事業の中心として活躍するようになった。3月からはサポステで外の社会の就労支援を受け始めた。面接当初から自らコーチに不安を質問し、自分の気持ちを受け止めてもらっていた。また、Fさんは、後半気持ちが落ちてアルバイトの連絡をもらっても断ることが増えたが、助成金のおかげで関係が切れずに連絡を続けてもらい、就労を継続することが出来ている。

Mさんはなかなか意欲がわかなくて停滞する時期が長かったが、最近復活してきた。就労体験に挑戦できるメンタルになってきた。これは、ピアジョブコーチを続けてきた成果であると思う。仲間関係が進んでいくと社会参加の意欲が沸いてくるようだ。逆に、居場所事業に参加しないでピアジョブコーチだけを望んだIさんは、精神的なつながりが作れなかった。ちょっとした挫折を乗り越えることができずに、静かに遠ざかってしまった。この点で、ピアジョブコーチシステムは居場所事業とセットの方が機能すると思う。

広報活動はすぐに現れる成果はほとんどなかった。計画ではあと1, 2名増える予定だった。相談は数件あったが、結びついたのは1件だけだった。居場所事業の方は1月以降に2人増えたので、今後はピアジョブコーチにつながっていくだろう。何より良かったことは、ひきこもり支援連絡会議での広報だ。居場所事業として団体の事業年数に差があるために起こる違いだと思うが、就労支援よりもまず充実した居場所事業という事は共通認識である。その上で、メンバーの社会参加や就労支援に直面している団体は、ピアジョブコーチに非常に興味を持っていた。居場所事業が機能している団体ならば、一つのスタイルとしてピアジョブコーチは有効な方法だと思うので、その団体のやり方で実行して欲しい。